

北京大学大学院における講義と中国の歴史地理学の現状

菊 地 利 夫

1. 出講の経過概要

〔侯仁之教授からの依頼〕平成6年10月から11月にかけて、私は北京大学の大学院歴史地理学専攻生に「歴史地理学方法論」の講義（2単位）をした。これは私にとっては初めての経験であったから、皆目見当がつかないことが多く、同様の経験がある筑波大学の人々に事情を伺って準備を進めた。地球科学系の奥野隆史教授は吉林大学で計量地理学原論を講義し、歴史人類学系の大浜徹也教授は北京大学で日本文化史を講義した。また、愛知産業大学の安藤萬寿男教授は南京大学で低湿地の開発を講義している。これらの方々の御助言は大いに役立った。今後も中国の大学から歴史地理学会の会員が講義を依頼されることがあるだろうから、その時の参考になれかしという老婆心から、私の経験を報告することにした次第である。

平成5年の春、北京大学の大学院で講義してほしいという打診の手紙が届いた。これは北京にある中国社会科学院の教授である辛徳勇氏からであった。彼は北京大学の非常勤講師であるが、最近まで西安市の陝西師範大学の副教授であり、歴史地理学を担当し、中国歴史地理学会の学会誌「中国歴史地理学論叢」を編集していた。この期間に私の著書『歴史地理学方法論』（大明堂、1977）を中国語に翻訳して6回にわたってこの会誌に掲載した。これが中国の歴史地理研究に、ある反響を起こしていた。

平成6年の冬、来春の講義をできるかと2回目の打診があった。このころ私は入院・手術をしていた

ので断った。平成7年の春、秋の講義はどうかとの問い合わせがあった。私は健康を回復していたので承諾した。夏になって北京大学の外事処からの正式の依頼状が来た。続いて大学院の主任教授の侯仁之氏から挨拶状と依頼状が届いた。書面を読んだら、彼は84歳でなお現役であったから、78歳の私は高齢と断るすべもなく、負けぬ気で引きうけざるをえない羽目になった。

〔出講準備〕にわかに多忙になった。パスポートはまだ有効期間があるので、ビザの取得に中国大使館に出かけた。2階の窓口はビザの申請者と受取人で待合室は満員であったが、公用の窓口には数人が立っただけであり、手続きはすぐに終わり、10日後の受取日を指定された。

北京大学の外事処によれば、政府が招く「国賓」には、旅費・滞在費・食費を政府が支出し、宿舎を用意する。大学が招く「外賓」には旅費は支出しないとのことであった。北京往復の航空券は私の自弁であった。また、北京滞在中は観光・視察旅行の自動車と案内人を用意するとのことであった。

何回かの手紙を北京大学の歴史地理学研究中心と往復させて講義条件を確定した。講義は月～金とし、土・日は無し、毎日の連続講義として1日2時間（午前9時から11時まで）、午後は休憩か視察とする。講義の聴講者は約25名、大学院生15名、教員6名、中国社会科学院の研究員数名とする。座談会は随時に開く。歓迎パーティを用意する。宿泊所は外国人教師用アパートとし、食堂は学内の外賓用食堂とする。宿泊所は寝室と応接間を用意し、湯茶はメイド付で

準備する。講義に使用する言語は、申し出に従って通訳者を用意すること。私の日本語は北京大学の地理学系主任の王北辰教授が担当することになった。

北京滞在中に王北辰教授は、私の著書『新訂歴史地理学方法論』(大明堂, 1988)を完訳して来年出版すると、その分厚い原稿を見せてくれた。王北辰教授は背が高い上品な人柄で、日本語は流暢であった。

出発前の最大の負担は講義原稿の作成であった。通訳者に講義全文のプリントを前もって渡さなければならぬ。与えられた講義時間は約20時間、そのうち2分の1は通訳の時間として、約10時間は私の講義時間である。普通の話し言葉のスピードなら、1時間に原稿用紙(400字詰)を15枚くらい、すこし早口なら20枚位を読みあげる。10時間分なら原稿用紙150~200枚分である。この中に、北京大学の注文による「歴史地理学方法論」をもちこまなければならない。北京大学からは、私の著書『新訂歴史地理学方法論』を大学院生に分かりやすく講義してほしいとのことである。

この原稿は1カ月をかけて書きあげ、出版社にワープロを頼んで9月はじめにできあがった。出版社から30部と請求書を届けられて、それを見たら、暑い夏なのに冷汗がでてきた。早速1部を王北辰教授に送り、準備をお願いした。

もう一つ心配したのは、北京大学の先生方や学外から訪問する研究者に対するお土産であった。経験者の助言では、自著の書籍や論文がよいとのこと。私は『新訂歴史地理学方法論』と『日本歴史地理概説』(古今書院, 1984)を30部ずつ箱詰めにして用意した。この土産は非常に喜ばれ、先方から自著の書籍・論文をたくさんいただき、トランク一杯になった。

10月22日14時55分、私たちを乗せた北京行中国航空便は東京国際空港を離陸した。私の旅行に同行者は3人であった。鹿児島経済大学教授の森 勝彦君と茨城大学助教授の小野寺 淳君、千葉県立中央博

物館学芸員の白井 豊君であった。この3人は筑波大学卒業の歴史地理学研究者である。3人は私の雑用をすべてこなし、話し相手になってくれたので異国にいる寂しさを感じなかった。小野寺君や白井君の中国語が通じるので感心した。ことに森君は中国史や中国の歴史地理の研究者で、中国各地を調査旅行して中国の友人も多く、私たちの視察案内役はみごとであった。記して3君に感謝する。

〔北京大学へ到着〕私たちは22日18時15分に北京国際空港に着陸した。空港で両替した中国の1元は日本の11円であった。日本円が高くなったのに驚いた。空港には辛徳勇氏と院生2人が出迎えにきてくれた。

空港は北京市街の東南にあり、北京大学は市街の東北にある。大学の自動車で約40分、夕闇せまる北京市街を走りぬけた。10年前にくらべて市街は大きく変わっていた。高速道路ができ、その両側にあった低い住宅街がなくなり、高層ビルがどこまでも林立していた。

北京大学に着き、食堂で簡単なパーティが開かれ、宿舎に案内された。そこは外国人教師用の宿舎であり、5階に寝室と応接室を与えられた。レストランは別棟にあった。宿舎係の女性が魔法瓶2本、湯呑茶碗数個とさまざまなティーパックを載せたお盆を持ってきた。ニコリともしないで部屋に入り、出て行った。これが北京大学における第1夜であった。

10月23日(日曜日)、北京の秋は快晴が続く。午前中に侯仁之教授と学部の主任を務める韓光輝副教授と辛徳勇氏が挨拶と講義の打合せに来た。快談すること数時間、大学構内を案内してくれた。キャンパスは明王朝の王室の庭園で樹木が茂り、縦横に道路が走り、道の両側にイチヨウの並木の葉が色づき、明代の建築様式の校舎が樹間に見えかくれし、当時の彫刻があちこちに立ってあった。

講義開始は10月24日、教室は新築の地学棟の3階であった。1~2階は地質学系の教室であり、3~4階は地理系の教室であった。歴史地理学の教官室と

教室は3階にあり、私の講義室は演習室らしかった。入口に先生方と院生たちが廊下の両側に並び、拍手して迎えてくれた。

侯仁之教授は私と握手して5人の教官を紹介した。王北辰教授(1921年生まれ)は歴史経済地理、干希賢教授(1940年生まれ)は地理学思想史・風水地理学、韓光輝副教授(1948年生まれ)は歴史人口地理学、武弘林副教授は歴史経済地理、韓茂莉副教授(1955年生まれ)は宋代の農業地理が専門の女性研究者であった。大学院博士後の院生2名、博士課程の院生13名および、北京市の中国社会科学院の副所長の伊鈞科氏と教授の辛徳勇氏などが聴講者であった。

講義は午前9時~11時までの2時間の予定であったが、質問などがにぎやかに行われて、終わるのは11時30分ころが多かった。用意したプリントも残り少なくなり、2日目は王北辰教授が予備のプリントも配ってしまった。プリントだけを貰いに来る院生もあった。私はプリントの段落に従って約10分くらい話して、次にその部分を王北辰教授が通訳した。この時間が少し長いのは、教授の解説が加わるからであった。順調に進めばよいが、質問が飛び出せば終了の時間が延びた。

私の前に席を留めている先生方は、通訳に従ってノートをとったり、プリントに赤鉛筆でアンダーラインを引いたり、私が話すときは私の顔を凝視していた。院生たちは忙しそうにノートをとり、隣の学生に聞きただしたりしていた。講義が終わると、質問する者、トイレに駆けこむ者がいた。先生方は講義が終わると私に軽く会釈して微笑していた。

食堂で朝・昼食を食べたが、夕食は日本食や西洋料理を食べに出かけることもあった。午後に来客の応接、学内施設の見学、市街観光をしたり、昼寝をして疲労をとった。

夕食後、お茶を飲みながらテレビを見た。いくつかのチャンネルがあり、毎日の放映プログラムは変わるが、毎日定時に同じ内容が放映されていた。中

国の都市・農村の開発事業の完成式の紹介、少数民族の生活状態と中国化、ある地方の自然改造の進行、計画中の大規模プロジェクトの説明、そして侵略した日本軍の残虐行為などを10~20分ずつ放映していた。

1日目の講義の終わりに、侯仁之教授は私の講義について院生にその意義を説明した。

「菊地利夫先生の歴史地理学方法論は中国の多くの研究者に知られている。歴史地理学の革命の進行をおし進めて、近代歴史地理学から現代歴史地理学への移行に大きな効果がある。それは地理学全体における基礎概念である絶対空間・時間を相対空間・時間に取り替えたことである。科学のパラダイムの入れ替えをして、地理学革命がはじまってから提出された多くの新しい理論を位置づけ、体系的な理論全体をつくり変えた。この思考作業が20年前に出版された『歴史地理学方法論』に発表されている。今や世界の地理学の革命は急速に進行している。中国の歴史地理学の現状はこの進行過程のどこに位置しているかを認識してほしい。私はこの講義は優れたものと評価する。」

それから侯仁之教授は、理論的著書と有名な北京歴史地図集を私に贈呈した。

〔北京市街の大改造〕午後よく市街観光をした。急ピッチで都市改造が進行していた。北京城を囲む旧城壁は環状高速自動車道となり、これから分岐する数本の高速自動車道が完成して車の渋滞は少ない。道路の両側には高層商業ビルが林立し、25階建ての高層住宅が立ち並んでいる。ここにはそれまで、胡同という古くてせまい横道に、四合院という低層住宅がひしめきあっていた。この住宅を取り払って広場をつくり、高層ビルと緑地をつくった。この再開発は社会主義国家でありがちな強引な手法で進行している。1990年から実施された。昔からの居住者が続いて高層住宅に入居できる例は少ないという。

北京市の人口は50年前に100万人であったが、1990年には1000万人を超えた。北京駅の構内や広場は、

内陸の農村から流れこんできた人々の溜り場となって足の踏み場もない。この人口移動を「盲流」という。

盲流によって中国沿海部の大都市は人口が急増している。盲流の人々は職もなく、住宅もない。盲流の発生原因は都市にも農村にもある。農村に機械が入って、農業余剰労働力が生じて人口をおし出し、仕事と金を求めて大都市に移動している。大都市では下級労働者の需要が大きい、盲流を全部消化するほど労働市場は拡大していない。ここに都市問題が深刻に発生している。

〔周口店の猿人洞の視察〕北京大学から西南50Kmの所に北京原人の洞穴遺跡がある。ここは龍骨山という石灰岩の洞窟群である。堆積層から、中部更新世（70万～13万年前）であるという。

この遺跡は周口店という村の中に、幅1.5km、長さ南北に3kmの低い山地に20数カ所の洞穴と裂目があり、その一つが猿人洞と呼ばれている。1921年に臼齒を発見、北京原人と命名された。日中戦争が終わって発掘が再開され、男女の化石人骨が40体と石器を多数発掘した。厚さ40mの堆積層から、約90種類の哺乳動物の化石骨と62種の鳥類の化石骨が出土した。

北京市外文出版社発行の“*Early man in China*”（初版1980年）によれば、北京原人はこの洞穴に数10万年間も居住し、火を使って生活していた。この洞穴内居住説は定説化し、特に中国考古学者の多くがこの説を信用している。1980年代になると、原人は日当たりのよい場所を選んで生活していたという。原人が火を使用していたという証拠を再検討すべきであり、原人は組織された狩猟人であったことも疑わしい。今は原人の地上生活説が強力になっている。猿人洞の形態や、堆積層と動物の化石骨の吟味から反対論が主張されている。私も洞窟内を歩きまわったり、展示室の遺物などを観察して、両学説をくらべて興味深く感じた。

〔天津と大運河の視察〕27日、講義を終わると直

ちに昼食をとり、天津行の列車に乗った。白井君が昨夜遅く北京に到着して、総勢4人となった。夕方、天津のホテルに投宿、森君の友人である天津社会科学学院の研究者が案内人となり、明日のコースの打合せに来た。28日は市街観光と大運河を視察して再びホテルで宿泊し、29日は高速バスで北京に帰ることにした。

天津は再開発が始まったばかりであり、戦前の外国租界がまだ残っていた。租界は各国それぞれの特色がある建築物と町並みがあった。

さらに、大運河が通る揚柳市に行った。大運河は昔のまま残っていた。運河の幅は30～50m、深さ10数m、水深数mであった。運河は、両側の近郊農業の野菜畑の灌漑用水の供水源と成っていた。兩岸のいたる所に揚水機場があり、畑地灌漑の用水路に揚水していた。機械揚水以前に桶で汲み上げる人海戦術を行っていた水汲み場と道が残っていた。

揚柳市は運河の水運時代には船着き場で、物資の集散地として栄えた。船着き場に大倉庫が並んで市街をなしていたという。この船着き場は河道をつけ代えて埋立て、公園となっていた。市街は自動車道路のターミナルに移動していた。町の歴史博物館に行き、その頃の絵図や文書を見た。

29日の北京行きはノンストップの高速バスで1時間の乗車であった。往路の鉄道沿線の農村と復路の道路沿線の農村をくらべて観察できた。

〔歓迎パーティと院生の別れの挨拶〕11月1日は夕食パーティに招待された。参加者は私と白井君（森君と小野寺君は日本に帰国していた）の2人、中国側は侯仁之教授他5名と地理学系から主任教授の崔海亭教授と教員数名であった。場所は学内食堂の貴賓室であった。

侯仁之教授の挨拶について、崔海亭教授は学系の全教員60名を代表して熱烈歓迎をする。全教員が先生の御講学をよく理解しようとしているとの挨拶であった。約3時間の歓談でお開きにした。

日本を立つとき、歓迎パーティがあれば返礼パー

ティを開かねばならないこともある。そうならないようにうまく切り抜けるとの助言があった。私は万が一のことも考えて20人分のパーティ費用を用意していたが、返礼パーティを開かずに終わることができた。

講義の最終日の11月4日、大学院生はお別れの挨拶をしてさらに聴講記念として、郭沫若主編『中国史稿地図集』上下2巻を私に贈った。これは驚くべき内容の歴史地図集であった。私が地図集を開いてしばし見ていたので、院生たちは満足げに顔を見合わせていた。私が感謝の意を述べると、全員で拍手をして、それから芝生に出て記念写真を何枚も写した。

11月5日朝、一番機で帰国することにした。早朝まだ暗い中に辛徳勇氏と院生が空港までの見送りの車を出した。玄関を出たら、侯仁之教授と他の先生方が別れの挨拶に来て下さった。車は空港に向かって北京市街を駆けぬけた。北京の街はまだ眠っていた。

〔広州の中山大学の司徒尚紀教授からの連絡〕日本に帰って旅行の始末をしていたある日、王北辰教授から礼状が届いた。講義プリント全文を中国語訳にして会誌「中国歴史地理論叢」に掲載することになった。大学院生の間に歴史地理学の理論研究に新しい機運が発生した。広州の中山大学の主任教授である司徒尚紀氏に貴君を紹介し、講義プリントを送った。彼は最近に北京大学に留学して侯仁之教授の指導で学位を取得し、母校の中山大学に帰って主任教授となったなどと記してあった。また、侯仁之教授から新版の『歴史地理四論』（中国科学技術出版社）を贈ってきた。

日ならずして、広州の中山大学の司徒尚紀教授から長文の手紙とともに、著書『中国地理学史』『嶺南史地論集』『広東文化地理』『海南島歴史・土地開発研究』の4部を贈ってきた。私はお礼と私の著書2部を贈った。このように中国の先生方からの手紙がしばしば寄せられて、私は中国の歴史地理の現状を、

少しずつつながらわかるようになった。

2. 中国の歴史地理学の現状

〔大学の歴史地理学の研究機関〕大学は研究の中心であり、研究者のゆりかごである。中国において高等地理教育を行った大学は、1950年には20大学、1957年には27大学があった。このうち北京大学、上海市の復旦大学、広州の中山大学と西安市の陝西師範大学が優れていた。大学地理系は修業年限4年、定員20～30名の大学が多い。現在は南京大学の定員は130名、北京大学の定員は150名に増加した。1950年代の教授数は中国全体で120名であった。

大学に地理系の大学院を設置したのは、碩士学位学科は1990年に41大学もあり、博士学位学科は北京大学、南京大学、華東師範大学、東北師範大学、中山大学、陝西師範大学などである。地理学研究機関は大学のほかに、1965年から設置された地理調査所がある。これらは中国を担当地域にわけて、地理調査をしている。地理調査所は北京、南京、広州、東北、華北にある。また大都市には市立の人文科学院や社会科学院があり、この中に地理・歴史地理の研究者が活躍している。中国地学会にはこれらの研究者が加入してそれぞれの分科会議を設けているが、1990年に約1.7万人の会員のうち、自然地理部門が最も多く、歴史地理学部門と人文地理学部門ではほぼ三分している。

1980年ころから、大学の地理系の名前を変えた。北京大学では「城市与環境学系」とし、杭州大学では「区域与城市科学系」とし、中山大学や蘭州大学では「城市与区域中心」とした。城市とは都市であり、区域とは地域のことである。これらの名称は、「地理系」では漠然としているので、研究の重点を指向する分野の名称をつけたものであり、卒業生の需要が増加したからである。

卒業生の就職先は、学校教員ばかりでなく、国・県・市の行政官や民間企業・自営のコンサルタントなどが好調に増加している。これは国の経済発展の

ために、自然改造や都市の再開発、農村の近代化をおしすすめているので、この分野の企画者・技術指導者を必要としているからである。

〔北京大学の地理系と歴史系〕北京大学は中国で最も格調の高い大学である。その前身は明代（1898年）に開学した、京師大学堂という中国の最高学府であった。1912年に北京大学と改称した。1912年の学系数は14、学生総数は約2000人であった。1990年には学系数は29、学生総数は16,275人、その中で碩士・博士学位学科の学生数は2922人、外国人留学生は600人であり、正・副教授数は1600人となった。

城市と環境学系は3専攻に分かれている。1は経済地理学・城市地理学・環境計画学、2は自然地理学、3は地貌学・第四紀地質学である。これら専攻生は歴史地理学と人文地理学の単位を修得することになっている。

大学院において碩士・博士学位学科は5専攻に分かれている。1は自然地理学、2は地貌学と第四紀地質学、3は人文地理学、4は環境地理学、5は地図学である。

大学院の歴史地理学は歴史系に設置されている。歴史系の大学院では、碩士・博士学位学科は6専攻に分かれている。1は考古学、2は歴史地理学、3は中国古代史学、4は中国近代史学、5は世界近現代史、6は世界地区史学である。

中国の地理研究は自然地理、人文地理、歴史地理、地誌学の4大分野に分かれるが、自然地理研究者が圧倒的に多い。人文地理は勢力は小さい。歴史地理学は1940年代まで沿革地理学と呼ばれていた。歴史地理学は歴史自然地理と歴史人文地理と歴史区域地理の3分野に分けられる。歴史区域地理とは歴史地理学の中国語名である。

3. 文化大革命による地理学の変化

〔近代地理学の発達〕中国は伝統的地理学に加え、ヨーロッパやアメリカの地理学を輸入して近代化を歩んだ。1911年の辛亥革命後に中華民国政府の教育

部は大学令や師範教育令を發布して、大学文科と高等師範に学部として地理系・史地系・地学系などを設け、自然地理・人文地理・区域地理の諸課程に分けた。

中華人民共和国が1949年に建国されると、中国の地理教育と地理学研究に大変化が起こった。社会主義革命を成就するために、資本家階級の地理学を排斥して、ソ連の地理教育と地理学を採用した。司徒尚起著の『中国地理学史』によれば、批判・排斥されたヨーロッパ地理学者は次の通りである。フリードリッヒ・ラッツェルの環境決定論、カール・ハウスホーファーの地政学、トーマス・ロバート・マルサスの人口論、フランスのブラーシュとブリュヌの人文地理学などである。

中国は10数年間にわたって人文地理学を停止し、これに代わってソ連の経済地理学を採用した。1952年に従来の大学地理系は廃止して、ソ連モスクワ大学の地理系を模倣して、自然地理と経済地理の2課程を新設し、歴史地理学は歴史系に設置した。ソ連への中国留学生は増加した。ソ連地理学者が中国大学の教授に招かれ、ソ連の地理教科書が中国の大学・高等師範で使用されるとともに、ソ連地理学書の翻訳・出版が盛んとなった。中国の大学の地理研究室にソ連の地理学雑誌が積み重なった。このような状態が、1966年にはじまる文化大革命まで続いた。

〔文化大革命後の地理学〕動乱10年、1966～1976年までの文化大革命は高等地理教育を停止させた。他の科学の学者と同じように、地理学者は大学から地方農村に下放されて数年間の農業労働を強制された。大学の研究機関と図書・資料は紅衛兵の土足に踏みつけられた。この非難・攻撃に堪えかねて自殺した数人の地理学者がいた。

1980年代に入り、改革・開放の名の下に、社会主義国家の建設に役立つ科学として大学の地理教育と研究が再開され、ソ連一辺倒から抜けだした。1983年には全国人文地理学会が開かれて人文地理学が復

活し、人種・民族・風俗・文化の地理を研究することにした。アメリカの地理学者プレストン・ジェームスの著『人文地理学概論』と『地理学思想史』が翻訳・出版され、また、留学生が西側諸国にも派遣された。

1978年から国家の5カ年計画が地理学に研究を要求している諸問題の解決に協力することを要請された。それらの問題は次の通りである。地域の自然条件と資源調査、自然改造計画、自然災害・疫病の原因と分布、流域の発展計画、海岸調査、黄土・砂漠・凍土の分布・成因・改造と現在の土地利用、鉄道・道路の計画、水運の現状、商品流通、旅游（観光）地理。以上の諸問題は現在地理においても歴史地理においても、国家指定の重要課題となっている。

〔歴史地理学会の開催と会誌の発行〕中国では自然地理と人文地理と歴史地理は3分野を形成して、別々の学術大会・総会を開き、その会誌を発行している。歴史地理とは、歴史自然地理学、歴史人文地理学、歴史地理学、歴史地図学の4分野をふくんでいる。1979年に西安市において中国地理学会大会が開かれた。このとき歴史地理専門委員会が成立して、今後は2～4年毎に歴史地理学術大会を開催することを決めた。

1979年6月5日～13日西安市で第1回学術大会が開かれた。参加者70人、発表論文90篇であった。主任（会長）には上海復旦大学の譚其驥氏（1911～1992年）、副主任には北京大学の侯仁之氏（1911年生まれ）と陝西師範大学の史念海氏（1912年生まれ）が選ばれた。中国では80歳を越えても大学の現役の教授であり、学会活動の指導者である。会誌は「歴史地理」とし、1981年から発行された。

第2回歴史地理学術大会は1982年9月1日から5日間、上海市の復旦大学において開かれた。参加者105人、発表論文121篇であった。譚其驥教授は「歴史文献資料」、侯仁之教授は「最近の歴史地理学の発展方向」、史念海教授は「黄河流域の文化景観の変化」について講演した。

第3回歴史地理学術大会は1986年8月21日から、蘭州市の蘭州大学と交通部公路交通史編集委員会との共催で開かれた。参加者200名。この大会は1985年改選の新委員によって行われた。委員の年齢は50～60歳層に若返った。

1987年2月5日には西安歴史地理学会が成立した。陝西師範大学の史念海教授が会長となり、同年8月11日から14日まで第1回歴史地理学会を開催した。参加者40名。会誌「中国歴史地理論叢」を発行した。

第4回歴史地理学術大会（1988年）の開催地は太原市。中国地理学会と黄土高原歴史地理学術討論会の共催で、会期9月7日から12日まで、参加者83人であった。同年、第2回西安歴史地理学会が開かれ、参加者30人であった。

第5回歴史地理学術大会は1990年11月12日から16日まで開かれた。会場は上海市の復旦大学、発表論文117篇、参加者120人であった。

第6回歴史地理学術大会は1992年4月20日から26日まで長沙市で開催された。参加者90名。楚越洞庭学術討論会と共催した。同年5月24日から28日まで、第3回西安歴史地理学会が西安市にて開催された。参加者60名であった。

4. 中国歴史地理学の理論

〔理論は三転した〕中国の政治情勢は三転した。この激変に対応して、歴史地理学の理論が3回も変わらざるを得なかった。

1950年ころからはじまった地理学の革命は中国ではいかに進行したか。それは3期に分けられる。

第1期は1945年第二次世界大戦に勝利して中華民国の立て直しを英米の援助の下に行った時期である。英米の地理学理論を入れて近代化をさらに進めようとした。第2期は1949年に中華人民共和国を建国して社会主義国家に変わり、ソ連のマルクス地理学を全面的に採用し、毛沢東思想によって理論をつくり替えた時期。台湾と香港のみが英米の理論をとりつづけた。第3期は文化大革命（1966～1976年）の動

乱によって地理学の教育と研究が停止し、その後には鄧小平による改革・開放の時期となる。中国は世界における地理学の革命の進行状態を知って真剣に追いつこうとしている時期である。ソ連一辺倒を止めて、西側の地理学理論の輸入を開始した。私が北京大学に招かれたのはこの時期である。

中国に歴史地理学の概論や理論の著書が多いのは、この三転に対応して出版されたからである。次の著書は一例である。

1. 王庸 『中国地理学史』1938年
2. 吳淦 『地理環境与社会發展』1950年
3. 王振徳『地理環境——人口と社会の發展關係』1955年
4. 仲鉅元『地理環境在社会發展中作用』1958年
5. 王振另『中国歴史地理』1976年
6. 黄盛璋『歴史地理論集』1982年
7. 侯仁之『歴史地理学的理論与实践』1984年
8. 鞠継武『中国地理学發展史』1987年
9. 王育民『中国歴史地理学概論』1987年
10. 刻盛佳『地理学思想史』1990年
11. 司徒尚起『中国地理学史』1993年
12. 張歩天『歴史地理学概論』1993年

〔中国歴史地理学の理論〕中国歴史地理研究者に歴史地理学の本質理論を聞いてみよう。北京大學学報に、最高の理論家といわれる干希賢教授の論文がある。これによれば「人類活動而引起 人類歴史時期 地理環境変化」が研究主題であり、これを復原し、その「發展的規律」を明らかにすることにありという。この考え方は、中国歴史地理学会の定説である。

中国では地理的空間を環境として認識し、分布・景觀・地域・空間的組織などの概念を採用しない。この環境概念は、中国科学院・地理研究所の所長である黄秉紙氏が、多くの研究者の見解を総合して、「地理環境 就是岩圈 水圈 気圈 生物圈的相互作用 主要是物質 能量交換所形成的物質体系 統一物体的發生發展」と説明している。それは唯物弁

証法による生態学的環境を考えているのである。このような環境は人類生活の發展的条件であり、これを「人地關係」であるという。両者の關係を「地人關係」といわない。「地人關係」は環境決定論であり、資本家階級の理論である。人類活動は地理的環境を改善する。地理的環境は人類生存に必要な資源にさまざまな条件つけて与えるという相互關係にあるとする。そして、「其主動力 不在自然 不在人類 而在生産力与生産關係」とし、地理環境と人類との關係を媒介するものを挿入して、この相互作用の中に法則を発見しようとしている。

このようにすれば、歴史地理学は個性記述の科学ではなく、法則定立の科学となる。このため改革・開放の時代になると、モデルや法則を追求する計量地理学が大流行している。世界においては新歴史地理学としてさまざまな新理論が生長しているにもかかわらず、その採用は阻害され、歴史經濟地理学のみが突出して発達するが、他の部門はあまり発達しない。

私は北京大学での講義において新歴史地理学を実証主義的方法と人文主義的方法にわけ、実証主義的方法として計量主義的歴史地理学のモデルと法則の追求、さらに個から普遍にいたる構造主義的歴史地理学が生長し、人文主義的方法としては、知覚環境論や觀念論や現象学的歴史地理学がそれぞれの人間像の下に理論を成立させていることを述べた。このことは新歴史地理学の理論の全体像を理解していただき、中国の歴史地理学が世界の進歩の過程のどこに位置しているかを悟ることに役立つと思う。

中国の歴史地理学者は、他の科学者も同じであるが、いかなる理論と方法をもって研究するかという深刻な問題に直面している。今日は三転の時期に当たっている。80歳代の最高指導者層は若いころ欧米の地理学理論を身につけたが、1950年代からマルクス地理学に変身しなければならなかった。そのころの著書・論文において、唯物弁証法と唯心弁証法の対立が研究者の精神内で激しかったことを告白して

いる。しかし1980年代からの改革・開放によって西側の新理論が眼前に出現した。50～60歳代の研究者は小学校時代からマルクス地理学によって教育されてきたが、1980年代からは西側の理論を知ってその百花斎放に驚いている。

これらの変化は、前述の概論・理論の著書や論文を見ればよく分かる。発行年度が1930年代ならば、引用文献は西側のもが多い。50～70年代ならば、引用文献は圧倒的にソ連のものである。80年代になるとソ連の文献は影をひそめ、代わって西側のもが多くなる。これと併行して、中国思想の中に古代から唯物弁証法の論理が存在していたことを例証して、中国独自の社会主義理論を主張する研究者が現れてきた。

5. 歴史地理の研究論の発表

〔発表の機会〕論文発表の機会は、著書と地理学雑誌と学術大会がある。2～4年毎に開催する「中国歴史地理学術大会」と「西安歴史地理学会」がある。さらに会誌として前者は「歴史地理」を発行し、後者は「中国歴史地理論叢」を発行している。その他に歴史地理学論文を掲載する定期刊物は30種もある。その主なものは「地理研究」「地理科学」「経済地理」「世界地理集刊」「冰川凍土」「中国沙漠」「熱帯地理」などの月刊・隔月刊誌である。さらに全国の大学の地理系や歴史系と高等専門学校などの年1回の「学報」が重要である。

学会誌「歴史地理」は1981年から年8～9回の定期刊行であり、上海復旦大学に編集部がある。会誌は約200頁（1頁は800字詰）で、論文は約10篇掲載している。「中国歴史地理論叢」は1981年から年4回発行の定期刊行である。編集は西安史の陝西師範大学と西北大学である。250～260頁で論文が10篇とその他が掲載される。両者の編集方針はほぼ同じであるが、「中国歴史地理論叢」が幅広いので、この編集方針を記しておく。掲載論文は自由投稿である。その種類は理論と方法、歴史自然地理、歴史人文地理、

地名学の研究、方志学の研究、古都学の研究、文献紹介、地理学史の研究、関連科学の紹介、歴史地理の新書紹介、問題討論、発掘紹介、国外学者の基本理論の紹介などである。また2年毎に文献索引が加わる。

〔どの部門・時代の研究が多いか〕筆者の手元に1988年、1989年、1990年の索引がある。1991年以後の索引はまだ掲載されていない。発表論文数は非常に多く、1989年に891篇、1989年に713篇、1990年に963篇に達している。大まかに発表論文数を分けると、2つの会誌に年間約300篇、大学の学報に約150篇、その他の学術雑誌には論文題名、発表者名、雑誌名と巻数が、歴史地理学の部門別に記録されている。

表1は部門別の統計である。これによって歴史地理のどの部門の研究が多いかを知ることができる。歴史経済地理の論文が全体の22.8%をしめて第1位であり、歴史交通地理の論文の9.6%を加えると歴史経済地理関係が圧倒的に多い。第2位は歴史政治地理の13.1%が多く、これに歴史軍事地理の3.8%を加えて考えるべきであろう。第3位の歴史自然地理は12.4%で、自然改造の政策に役立っている。また、歴史都市地理も第6位で8.1%に達しているのも、都市再開発政策からの要求であろう。「歴史人口地理」「歴史民族地理」「歴史文化地理」は、人文地理が復活してもないことから不振である。理論・方法論は唯物弁証法の生態学的環境に固定しているから、その研究発表は少なくないのであろう。

表2は、どの時代の研究が多いかを示すものである。中国の歴史地理研究には「時の断面」を使用するが、それは王朝末に境界を設定している。この統計では秦以前が20数%をしめるが、その3分の2は地名考証や事物起源の研究か発掘報告である。残り3分の1は周・戦国時代の歴史地理である。

中国の古記録が多いことは世界のどの国も比すべくもないが、その数は約10万巻といわれる。そのため文献資料に依存する研究が多いので、現地調査や

表1 部門別の発表論文数

年度	1988	1989	1990	合計 (%)
歴史経済地理	178	212	197	587 (22.8)
歴史政治地理	122	107	108	337 (13.1)
歴史自然地理	102	112	104	318 (12.4)
歴史交通地理	109	67	72	248 (9.7)
歴史民族地理	62	89	87	238 (9.3)
歴史都市地理	72	37	98	207 (8.1)
歴史人口地理	47	47	53	147 (5.7)
発掘報告	38	0	59	97 (3.8)
歴史軍事地理	30	22	45	97 (3.8)
歴史文化地理	35	0	46	81 (3.2)
文献紹介	68	0	81	149 (5.8)
通論	30	20	13	63 (2.5)
合計	893	713	963	2569 (100)

表2 時代別の発表論文数

年度	1988	1989	1990	合計 (%)
秦以前	225	154	215	594 (23.1)
秦・漢	59	84	99	242 (9.4)
三国・南北朝	34	28	48	110 (4.3)
隋・唐	81	69	92	242 (9.4)
宋	45	29	83	157 (6.1)
金・元	30	33	44	107 (4.2)
明	67	85	77	229 (8.9)
清	122	80	127	329 (12.8)
自然研究	102	112	104	318 (12.4)
時代地理	98	8	46	152 (5.9)
通説	30	31	28	89 (3.5)
合計	893	713	963	2569 (100)

発掘調査が強調されている。研究発表は、文献記録が多い時代に集中している。明・清の時代の研究が多い。これに次いで唐・宋の時代の研究が多い。「〇〇時代の自然研究」という論文もまた多い。また「通説」という中国の歴史地理概説が続々と発行されているのは、歴史の見直しが行われているからである。「時代地理」というのは、ある王朝期の特定地域の歴史地誌である。中国は古来から歴史地誌の名著が多い。最近では、観光地理学である旅游地理学が発達したことが、歴史地誌の著書を増加させている。

6. 私の講義内容の趣旨

私は中国の歴史地理の現状を上述のように認識して、北京大学における講義案を検討した。侯仁之教授からの依頼は、私の著書『新訂歴史地理学方法論』（大明堂、1988）を中核にしてほしい。聴講者は大学院の博士学位学科と博士後学科の学生であるとのことであった。しかし別便によれば、大学院の教員全員と中国社会科学院の研究者も聴講するとのことであった。

侯仁之教授は中国歴史地理の最高峰である。王北辰教授は歴史交通地理の第一人者であり、干希賢教授は風水地理と地理思想史の第一人者である。また、副教授の韓光輝氏はソ連に留学してソ連歴史地理学の理論家であり、韓茂莉副教授は小柄な女性であるが、宋代の農業地理の研究者として令名が高い。これらの人々は私の理論と自分の理論を比較するだろうから、私の講義を大学院生レベルより高くする必要があると思った。

また、北京大学の学生レベルは中国最高であるといわれる。小学生児童10万人から北京大学生が1人出るという秀才である。院生は学部学生よりさらに高いレベルであろう。日本の大学院生と比較したくなる。彼らが何を、いかに質問するかは興味あることだ。

私の講義内容は『歴史地理学方法論』を発行してからすでに10数年も経過しているのだから、ここでは改めて述べる必要はない。講義の基本的事項を箇条書に記してみよう。

1) 世界的視野から、歴史地理学の理論が近代的から現代的にいかに行っているかを明らかにした。ある歴史地理学者の方法論ではなく、また、ある国の歴史地理学の方法論ではなく、世界全体に歴史地理学の革命がいかに行っているかを述べる。

2) 歴史地理学の理論において、部分的な改造ではなく、その基礎構造をつくっているパラダイムを取り替えた。すなわち、近代歴史地理学は絶対空間・

時間の上に理論づくりをしているが、現代歴史地理学は相対空間・時間の上に理論全体を再構築している。そして、部分的に革新された理論を全体理論体系の中に位置づける。

3) 従来の科学分類は対象による分類が行われた。いまは方法論による分類が行われ、さらに科学する人の世界観によって分類するようになってきた。私は歴史地理学の方法論を、実証主義的方法と人文主義的方法に二分した。実証主義的方法は、物を中心として事象の外部から説明する視点である。人文主義的方法は、人を中心として事象の内部から解釈・理解する視点である。実証主義的方法は18世紀からの生存競争・優勝劣敗・民族の差別観を基底において成立している。人文主義的方法は、古代から洋の東西に成立して発達した。人文主義は普遍的な人類

愛にもとづき、民族の斉一性に立ち、遅かれ早かれ同一の人類文化に到達するという理念に立脚している。社会の進化についても、必然的に究極の段階に向かって進行するという唯物弁証法や、歴史は世界精神の顕現過程であるという唯心史観は仮定的プロセスであり、時間は強制的に変化させるという絶対時間を考えている旧理論である。時間は最小の確率から最大の確率までの幅の中で変化できる可能性を与えている相対時間から再考すべきである。

4) 世界各国の歴史地理学の理論体系は貧弱であった。私は全理論体系として、本質論・復原論・説明・解釈理論・知識性格論・叙述論として新しく取り替えたパラダイムの上にこれらの理論を構造的に構築した。